９　「発心集」鴨長明 ─中世の仏教説話集

20年度　南山大学

★　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合上、原文を一部改めてある。

　昔、ａ男ありけり。をのこ子二人持ちたるにとりて、兄は先の妻の腹、弟は今の妻の腹になＡむありける。かかれど、兄のをのこ、のために、①つゆもおろかならず。失せにしわが母のごとく、ねんごろに孝養すれば、①母また、わが子にも思ひおとせることなかりけり。

　二人の子、やうやう②人となりて後、父、先立ちて病を受けて死なＢむとする時、母に言ふやう、年ごろ、この兄のをのこをあはれみはぐくむことは、ことの折節にみな思ひ知れり。②うしろめたなかるべきならねど、何事もあとのことを思ふに、なほが③いとほしくⅠ覚ゆるなり。われを深く思はば、わが形見と思ひて、いとⅡほしくせよと、泣く泣く言ひ置きて死ぬ。その後、母、このことをたがへず、やや弟にもまさりて　　Ｘ　　あはれみける。

　かかるほどに、ともに大人になりて、兄のをのこ、妻をまうけたり。この妻、かたち良くて、見る人多く心を動かす。その中に、朝夕公にＡ仕うまつりて、身のほどよりし、おごれる者ありけり。おのが身、君に知らａれ参らせたることを頼むにやありけＣむ、夜な夜なｂ男にもはばからず、ややもすれば、あらはれて通ふを見るに、この弟のをのこ安からず、おこる後のことも覚えず走り出でて、これを殺しつ。

　隠すとすれど、このこと世にＢ聞こえて、すなはち弟の男からめｂられぬ。死する者の親しき者ども、早く命を絶たるべき、く訴へ申す。上にも御とがめ軽からざりければ、検非違使Ｃうけたまはりて、殺さむとす。

　その時、兄の男、進み出でて申すやう、弟の男は、さらにおのが身のために仕うまつりたることにあらず。わがみなもとに侍り。早く、われ罪を蒙るべしと申す。弟の言ふやう、兄はかの女の男と申すばかりにてこそ侍れ、④さらにしたることなし。われ　　Ｙ　　Ⅲ罪は蒙らめと申す。

　兄弟、かくのごとく争ふ間に、上にも、はからひわづらひ給ひて、一人を罪せｃらるべきにとりて、かれらが申すことども、みななきにあらず。さらば、母をＤ召して、彼が申さＤむによるべしと定められぬ。

　すなはち召し出だして、このことを問はｄるるに、母、⑤とばかり思ひわづらひて、涙を流しつつ、弟に罪せらるべき由を申す。その時、検非違使、③思ひの外に覚えて、ゆゑを問ふ。④母の申すやう、兄はなり。弟はまことの子なり。しかあれど、いとけなく侍りしより、彼もまことの母と頼み、われも子に思ひおとⅣすことなし。いはんや、父まかり隠れし時、ねんごろに申し置くこと侍りき。⑤その言葉、心の底にとまりて、昔を思ひ出づるごとに、ただ今聞くがごとし。たとひいくたりのわが子を失ふとも、彼をば助けむと思ふ。すべては、父まかり隠れて後、これらを左右にすゑ、兄をば父の形見と思ひ、弟をばわが身と頼みて、もろもろの愁へをなぐさめつつ、月日を過し侍るに、今ここに罪を蒙れり。すなはち、わが身の報ひのつたなきと言ふ。

　聞く人、みな涙を流してあはれＥむ。深く訴へ申しつる者ども、また、これをあはれみあへり。⑥このこと、上にＥ聞こしめして、三人ともにやむごとなき者なり。罪をなだめて許すべしとなむＦ仰せｅられける。

問１　=線部ａ「男」、ｂ「男」はそれぞれ誰を指すか。その組み合わせとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

　　ア　ａ　父 ― ｂ　兄　　イ　ａ　父 ― ｂ　弟

　　ウ　ａ　兄 ― ｂ　弟　　エ　ａ　弟 ― ｂ　兄

問２　―線部Ａ～Ｅのうち、文法的に同じものの組み合わせとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

　　ア　ＡとＢ　　イ　ＢとＣ　　ウ　ＣとＤ

　　エ　ＢとＤ　　オ　ＢとＥ

問３　―線部①「母また、わが子にも思ひおとせることなかりけり」の現代語訳として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　母もまた夫が兄を大事に思っていたのと同様、実の子の弟とおなじように、兄のことを大事に思っていた。

イ　母もまた弟が兄を大事に思っていたのと同様、実の子の弟とおなじように、兄のことを大事に思っていた。

ウ　母もまた兄が自分のことを大事に思っていたのと同様、実の子の弟とおなじように、兄のことを大事に思っていた。

エ　母もまた夫が自分のことを大事に思っていたのと同様、実の子の弟とおなじように、兄のことを大事に思っていた。

問４　―線部②「うしろめたなかるべきならねど」とあるが、その説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　父は今の妻が兄のことを大切にしているのを知っていたので、心配するべきではないのだが、と前置きしている。

イ　父は今の妻が兄のことを本当に大切にしてきたかどうか心配し、その不安を率直に口にしている。

ウ　父は自分が兄弟を残して先立つことについて、申し訳なく思っていたので、そのことを最後に伝えようとしている。

エ　父は、安心して欲しいという兄弟の気持ちを知っていたが、それでも死後のことが不安になり、それを吐露している。

問５　　Ｘ　・　Ｙ　に入るものの組み合わせとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

　　ア　Ｘ　こそ ― Ｙ　ぞ　　　イ　Ｘ　なむ ― Ｙ　こそ

　　ウ　Ｘ　ぞ　 ― Ｙ　なむ　　エ　Ｘ　こそ ― Ｙ　なむ

　　オ　Ｘ　や　 ― Ｙ　こそ

問６　―線部③「思ひの外に覚えて」とあるが、なぜそのように思ったのか、その理由として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　検非違使は、母が夫の遺言に従わず、自分の子である弟を助けようとするはずだと思っていたが、母は逆に弟の罪を厳しく糾弾したから。

イ　検非違使は、母が無実である兄よりも、殺人を犯した弟の罪を素直に認めるはずだと思っていたが、母は逆に弟をかばったから。

ウ　検非違使は、母が真実を語ってくれるものと期待していたが、母は夫の遺言通りに兄を助けようとするばかりで真実を話さなかったから。

エ　検非違使は、母が先妻の子の兄よりも、自分の子である弟を助けようとするはずだと思っていたが、母は逆に弟への罰を望んだから。

問７　―線部④「母の申すやう」とあるが、「母」の言い分の内容として適当でないと思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　母は、兄弟のどちらかが罰を受ける事態になってしまったことについて我が身の果報の拙さを嘆いた。

イ　母は、たとえ実の子を何度失ったとしても、そのたびに兄を助けたいという気持ちを述べた。

ウ　母は、今回のことでかつての夫の言葉をありありと思い出し、夫を失った事実に涙した。

エ　母は、夫の死後、兄を夫の形見と思い、また弟を自分のことのように思って過ごしてきたと語った。

問８　―線部⑤「その言葉」とあるが、具体的にはどの言葉を指すのか。その言葉に該当する箇所の終わりの五字として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

　　ア　Ⅰ　覚ゆるなり　　イ　Ⅱ　ほしくせよ

　　ウ　Ⅲ　罪は蒙らめ　　エ　Ⅳ　すことなし

◎問９　本文の内容に合致するものとして最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

ア　先妻の子である兄は継母にたいして、実母に対するのと全く変わらない愛情をもって接してきた。

イ　父は、自分の死後も、先妻の子である弟を大切にしてくれるよう兄に頼んだ。

ウ　兄の妻は美しく、兄もまた朝廷に仕えてそのことを誇りにしており、うらまれてしまうことがあった。

エ　弟は当初から罪を隠すことなく、堂々とその正当性を主張し、無罪を求めた。

オ　検非違使は兄弟と母親それぞれの言い分を聞いて、三人の犯した罪を許すよう決定した。

【確認問題】

１　二重傍線部ａ～ｅの助動詞「る」「らる」の文法的意味は、受身（ア）・尊敬（イ）のいずれか、記号で答えよ。

　ａ〔　　　〕　ｂ〔　　　〕　ｃ〔　　　〕

　ｄ〔　　　〕　ｅ〔　　　〕

２　傍線部Ａ～Ｆの敬語動詞（敬語でないものもある）について、それぞれⅠ群から敬語の種類を、Ⅱ群からその終止形の意味を選べ。

　Ⅰ群

　　ア　尊敬語　　イ　謙譲語

　　ウ　敬語でない

　Ⅱ群

　　ア　うわさになる　　イ　おっしゃる

　　ウ　承知いたす　　　エ　お聞きになる

　　オ　お呼びになる　　カ　お聞きする

　　キ　おつかえ申す

　　　　　Ⅰ　　　　Ⅱ

　Ａ＝［　　　］［　　　］

　Ｂ＝［　　　］［　　　］

　Ｃ＝［　　　］［　　　］

　Ｄ＝［　　　］［　　　］

　Ｅ＝［　　　］［　　　］

　Ｆ＝［　　　］［　　　］

３　波線部①～⑤の解釈として正しいものを、それぞれ次から選べ。

　①　つゆもおろかならず

　　ア　なにごとにつけて寛大である

　　イ　少しも粗略に扱うことはない

　　ウ　それでもやはり用心深い

　　エ　まったく愛情が並一通りではない

　②　人となりて後

　　ア　立派な人となってのち

　　イ　宮仕えをするようになってのち

　　ウ　成長して大きくなってのち

　　エ　俗世をいやがって逃れてのち

　③　いとほしく覚ゆるなり

　　ア　不憫に思われるのだ

　　イ　かわいらしく思うのだ

　　ウ　気がかりなことだと思われるのだ

　　エ　生きていられないように思うのだ

　④　さらに過したることなし

　　ア　決して罪を償うことではない

　　イ　全然罪を償ったことにはならない

　　ウ　さほど過ったということでもない

　　エ　全く過ちを犯したというのではない

　⑤　とばかり思ひわづらひて

　　ア　しばらくのあいだ思案にくれて

　　イ　それでもやはり気にやんで

　　ウ　たいそうあれこれ思い悩んで

　　エ　ほんのつかの間判断に苦しみ

【補充問題】

４　波線部⑥「このこと」とはどのようなことを指すか。正しいものを次から選べ。

ア　母が実子である弟を助けてほしいと継子の兄に語ったこと。

イ　母が継子の兄を助けるために、実子の弟に真実を述べるようにと言ったこと。

ウ　兄が弟の罪をかばい、母が継子の兄を助けたいとの思いを述べたこと。

エ　兄弟がかばいあい、母が継子である兄のほうを助けてほしいと訴えたこと。

【解答】

問１　ア

問２　エ

問３　ウ

問４　ア

問５　イ

問６　エ

問７　ウ

問８　イ

問９　ア

【確認問題】

１　ａ＝ア　ｂ＝ア　ｃ＝イ　ｄ＝イ　ｅ＝イ

２　Ａ　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝キ

　　Ｂ　Ⅰ＝ウ　Ⅱ＝ア

　　Ｃ　Ⅰ＝イ　Ⅱ＝ウ

　　Ｄ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝オ

　　Ｅ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝エ

　　Ｆ　Ⅰ＝ア　Ⅱ＝イ

３　①＝イ　②＝ウ　③＝ア　④＝エ　⑤＝ア

【補充問題】

４　エ

【現代語訳】

　昔、男がいた。男の子を二人持っていたが、兄は前の妻の子、弟は今の妻の子であった。こういうわけであったが、兄の方は、継母に対して、少しも粗略に扱うということはない。死んだ自分の母のように、真心をもって親孝行するので、母もまた（兄を）、自分の子よりかわいがらないということはなかった。

　（この）二人の子が、しだいに成長して後、父が、病になって先立って死ぬ間際に、母に言うことには、（あなたが）長年、この兄の男の子を愛情をもって育てたことは、その折々に（見たので）みな承知している。（だから）心配するべきではないのだが、いろいろと（自分の）死後のことを考えると、やはりあの子（のこと）がに思われるのだ。私を大事に思うなら、私の形見と思って、かわいがってくれよと、泣く泣く言い置いて死んだ。その後、母は、この遺言どおり、だいぶ弟以上に（兄を）かわいがった。

　こうしているうちに、二人とも大人になって、兄は、妻をった。この妻は、美しくて、見る人はみんな心を動かした。その中に、朝夕朝廷にお仕え申し上げて、身分以上に、えらそうにしている者がいた。自分が、帝から知られ申し上げていることを笠に着てであろうか、毎夜夫にも遠慮せず、何かにつけて、（女のもとへ）やって来るのを見ると、この弟は心穏やかでなく、ことを起こしたあとのことも考えず走り出て、この男を殺してしまった。

　（事件を）隠そうとしたが、このことが世間に知れて、すぐに弟は捕らえられた。死んだ男の親しい者たちは、早く（弟の）命を断ちなさるべきことを、強く訴え申し上げた。帝のおとがめも軽くなかったので、検非違使は勅命を受けて、殺そうとした。

　そのとき、兄が、進み出て申し上げるには、弟は、まったく自分の身のために人を殺したのではない。私が（その）原因でございます。早速、私が罪をお受けいたしましょうと申し上げる。弟が言うことには、兄はその女の夫と申すだけのことでございまして、まったく過ちをしでかしたということではありません。私が罪をお受けしますと申し上げた。

　兄弟がこのように言い争っているので、帝も、どう処罰してよいか困ってしまわれて、一人を罰すればいいことであるが、二人が言うことは、それぞれ言い分がある。それならば、母を召し出して、母の申すことによって決めようと裁定なさった。

　すぐに（母を）召し出して、このことをお問いになると、母は、しばらく思い悩んで、涙を流しながら、弟を罰してくださる（ようにという）ことを申し上げる。そのとき、検非違使は、意外に思われて、そのわけを聞いた。母が申すには、兄は継子です。弟は実の子です。そうではありますが、幼くございましたときから、兄の方でも（私を）実の母と頼りにし、私も（兄の方を）実子以上に思ってきました。まして、父が亡くなりましたとき、念を入れて申し置いたことがございました。その言葉は、私の心の底に残っていて、昔を思い出すごとに、今聞くようでございます。たとえ、何人ものわが子を失う（ようなことがございまし）ても、あの子を助けようと思います。すべて、父が亡くなってのちは、この二人を左右に置いて、兄を父の形見と思い、弟を自分自身と（思って）頼りにして、もろもろの悲しみを慰めながら、月日を過ごして参りましたが、今ここに罪をりました。これもほかならぬ、わが身の前世の果報が至らずこのような不幸を招いたのですと言った。

　聞く人は、皆涙を流してかわいそうに思った。強く訴え申した者たちも、また、この母に同情した。このことを、帝もお聞きになって、三人ともに立派な者たちである。罪を寛大に扱って許せとお命じになった。